

極私的戦争詩

高野 吾 朗

エクソシズム

その昔 この外国の街を長く占領していたのは あなたの 生まれ故郷
いま あなたの目の前に建っている邸宅の残骸は そのころの支配者の
家族の暮らしの痕跡でしかない すっかり色の剥げた壁 ごみ捨て場と
化した庭園 豪華だったはずの門構えは今にも倒れそうで ひび割れた
ガラス窓から中を覗けば 埃まみれの家具や絨毯や調度品たちの只中を
獐猛そうな小動物たちが 我が物顔で這いまわる姿が見える この街の
現在から 完全に疎外されたままの この二階建ての廃墟のベランダを
さっきからあなたはじっと見つめていたが やっとその視線を 自分の
手元に移す あなたの手にしている一枚の古い白黒写真には ひとりの
美しい少女が この街ならではの伝統衣装を身にまとい 正面をじっと
にらみつけながら すっと立っている あの占領期にこの子は この
邸宅に暮らし 晴れた朝や 涼やかな夕暮れには 優しく微笑む両親と
ともに あのベランダに立ち はるか先まで広がるこの街を見下ろして
いたのだろう それにしてもなぜこの子は どう見ても占領される側の
民の子としか見えないのに この邸宅の実子として暮らせたのだろうか
謎解きを楽しむうちに あなたの中に 自分の生き方を一変しかねない
ような 重大な決断の瞬間が訪れる あなたは振り返ると 道行く街の

人々に向かって 驚くほどの大声でこう宣言する 「皆さん わたしはこの家を買います そしてきれいに修復して この家もこの庭も見事に生き返らせます」 しかし あなたの外国語を解してくれる者はおらず 気味悪いものを見るように一瞥だけを残し ただ通り過ぎていくばかり ただ独り 地元の古老らしき女性が 木陰に座り込んだまま 無表情であなたを眺めているだけだ 理解されないことを承知の上で あなたは一度も会ったことのないその老女に向かって さらに大声をはりあげる 自分の名前を伝え 自分の故郷について語り 自分の信条を述べ なぜいまこの街にいるのか どうしてこの家を買わねばならぬと思ったのか 淀みなく語りつくすと 老女が無表情のまま 美しく染められた数枚の薄い布を胸元から取り出して まるで国旗のように あなたに向かって はかなげにそれを振り始める その布たちの揺れ方が なぜか極北の空を舞うオーロラのように あなたはふいに寒気を催す しかしそれも一瞬で あなたの心には すぐに自信がよみがえる 「わたしは自分をまったく棚上げになどしていない——わたしのこの決断はわたしにだけできることなのだ——この決断が誰かを不幸にするのなら その責任ももちろん喜んで取らせてもらおう——それをただ怖がっているようではわたしは一步も前に進めなくなる」 再びあなたは 写真に目を落とす 皺だらけの白黒の世界の外側に 二人の人影がだんだんと見えはじめる ひとりはこの子の父親だろうか 恰幅のいい姿 ゆとりに満ちた表情で 彼は少女にこう語る 「おまえの体に どれだけ劣等民族の血が流れていようと わたしが全力でおまえを守ってやる」 もう一人はどうやらこの子の母親らしい 彼女も少女に囁きかける 「劣等者たちの中にも立派な人間はいるはず おまえもそんな一人です わたしにはちゃんとわかります」 二人が優しく話すほど 少女の表情は ますます青ざめ

その体はさらにこぼる この三人の団欒に 思わずあなたは介入する
何を言っても通じないことを承知で あなたはまたも大声をはりあげる
自らの名前 自らの故郷のこと 自らの信条 どうしていま この街に
いるのか なぜこの家を買うのか 自分の全てを 淀みなく語っていく
あなたの言葉のひとつひとつが 晴れ晴れとした気分のあなたを尻目に
空中で次々に 鋭利な武器へとその姿を変えていく 母親らしき人物の
両眼がえぐりとられる 脳が割られる 喉元が水平に一刀両断にされる
父親らしき人物の胸が幾度も刺される 腹が割かれ 性器が切断される
屋敷の床が 血の海と化していくその一方で 仕事を終えた武器たちは
そのまま次々に邸宅のあちこちへと散り 無残な残骸の修復を開始する
壁は往年の美しさを取り戻し 庭園は洗練さを取り戻し 門構えは再び
威厳を湛え 小動物たちは残らず駆逐され どの家具も どの調度品も
過去の栄光に 再び照り映える 父親らしき男のでっぱりとした腹から
死産したばかりの胎児が転がり落ちる（そうまでして 女性の気持ちが
わかると訴えたかったのか）皮膚をずりと剥ぎ取られた 母親らしき
女の顔には この街の民たちの特徴が濃厚である（そうまでして この
街の思いがわかると訴えたかったのか）「わたしは 自分自身を柵上げに
するような人間ではない」——自身の来歴と立ち位置を語る あなたの
口はまったく止まりそうにない あふれ出る言葉たちが ついに少女を
襲おうとしたその時 突然 あなたの頭上から オーロラが降りてくる
とても肌触りのよい 大きな布製のマスクらしきものに あなたの口が
すっぽり覆われる あなたの後ろから誰かが手をまわし それを優しく
おさえる あなたの耳に この街の言葉が優しく流れ込む 「そろそろ
休んではいかが?あの木陰で一緒に過ごしませんか」と言っているのか
「あの少女こそ 今のわたし」とでも言っているのか あなたの内部が

オーラに導かれるかのように修復されていく あなたの過去の痕跡は
どれだけ残るのか あなたという家を買うのは誰か あなたの眼に涙が

百貨店にて

今日はこの街でも 慰霊祭が大々的に執り行われているらしい
ずっと待っていてくれる恋人のもとへ急いで向かうべく 男が
下りのエレベーターが来るのをしばらく待っていると 同じく
エレベーターを待っているらしき 別の男たちの集団が 同じ
Tシャツを一斉に着ており 胸の辺りには大きく「わたしたち
LGBTQですけど それが何か?」と書かれてあって それを
ぼんやり眺めながらなお待っていると ようやく次が来たので
乗ってみると迂闊にも それは最上階までどの階にも止まらぬ
上りのエレベーターで おまけにあまりの混みようで もはや
彼以外にはもう誰も乗れないほどだ 仕方なく男が目を閉じて
息を殺し 恋人と最後に会った日を思い出していると ドアに
くつつくようにして立っていた彼の ちょうど反対側にあたる
後方の壁あたりから ぎゅうぎゅう詰めの沈黙を破り 噎れた
老女のごとき声が不意に上がった 「鳩があんなにもたくさん
飛んでる 式典が始まったのね」 このエレベーターは 実は
ドアが透明なガラスのみでできており 男の目の前では各階の
売り場の様子がめくるめくようなスピードで移り変わっていき
反対側の壁も透明なガラスでできていて 街が一望できるのだ
靴売場の賑わいが 男の目前をさっと過ぎていこうとした時
さっきの音が「敗戦直後は地獄でした」とつぶやいて まるで
音楽を奏するように語り始めた 「私はあの子と満員の汽車に
乗っていました ここみたいにぎゅうぎゅう詰めで 私と娘は

ドアのそばに小さくなっておりました 軍人の夫が 戦地から帰ってくる気配はいっこうになく 親子二人きり こんなにも貧乏で もう死んでもいいかしらと 心の中で彼に尋ね続けておりました 走る汽車はおんぼろで ドアは簡単に開きそうで娘を汽車から突き落とすことは造作ないことでした そのとき娘は拾ったピラ紙に ちびた鉛筆で一心不乱に むかし父親が買ってくれた靴の絵を ずっと描き続けておりました」 男はその声を聴きながら 恋人が先日話してくれた「黒猫」というアメリカの古い短編小説のことを思い出していた 「主人公が妻と飼猫を斧で殺したあと 壁に死体を二つとも塗りこめて隠してしまうんだけど なぜか壁から 猫の音が聞こえてきておかげで事件は露見してしまい 主人公は死刑になってしま」エレベーターが 寝具売り場の階を過ぎていく 老女の語りはなお続く 「先日 義母の夢枕に 夫が出てきたのだそうです 軍靴の歩む音が聴こえたかと思うと 誰かが家の戸を叩くのでまさか夢とは思わず義母が開けてやると ずぶ濡れの軍服姿で夫が立っているのです 『息子よ よくぞ帰った』と 義母が抱きしめようと駆け寄ると 彼がぼそりと 『墮落する勇気ももっとあればおそらく生き残れたのですが 母さん 濟まない』と言ったそうです そこで夢も終わったそうです ああ なぜ私の夢枕には一度も立ってくれなかったのだろう 悔しいです」男がようやく気づく エレベーターに乗っている人たちは 皆この国の人間ではなさそうだ この国は この人たちの祖国とはるか昔 敵同士ではなかったか 憎しみあっていなかったか ネイルサロンのある階が 目の前を過ぎていく 「夫の戦死の

知らせが国から届きましたが 国の言うことなど もはや誰が信じるのですか それからはずっと赤貧の日々で 生まれて初めて工場で働いたりもしました そこで機械に手を挟まれて」声がする方向に 男が懸命に顔を向けると 皺だらけの両手が人ごみの上に弱々しく突き出されており そこには一本も指がなかった 「妻子ある工場主の男に 肉体関係を迫られまして もちろん激しく拒んだのですが 賃金をもっと出すと言われて泣く泣く体を預けてしまいました 奥さんからは 『泥棒猫』『夫とおまえを 斧で叩き殺してやりたい』と言われました」最上階にやっと到着し 男がドアから出ると 残りの人たちもみな一斉に降りたが 老女らしき姿はどこにもなくて ドアが閉まりはじめると 反対側のガラス窓に向かって 一羽の鳩が突進してきた そのまま激しく窓に衝突すると 血に染まった窓に向かって 「私のところにも来てくれたのね ありがとう」と声がした まるで壁の中に塗り込めるかのように その声と鳩の死体を ドアが隠していく 「あなたたちに降りる自由が与えられているように 私には降りない自由が与えられている」最上階には さっき下で見たあのLGBTQのシャツを着ている女性の一団がおり そのシャツの背中側には 「ストレートのあなたにも カミングアウトすべきこと あるんじゃない？」と書かれてあり 彼女らがぼそりと「あの男 エレベーターでさっきからずっと登ったり降りたりしてる 頭おかしい人？」と話す中で 男はじっと 下りのエレベーターが開くのを待つ

日曜日の心中

あなたが毎日のようにその横を通り過ぎているあの小さな家には屋根がない 豪雨がかくも続いているせいで 家の中の四部屋はもはや「現代」「未来」「文明」といった言葉が 使えない有様だ もしもあなたが いったい誰が住んでいるのかといふかりながら探検家気分で 咲き乱れる紫陽花の庭を静かに抜け この民家の第一の部屋へ初めて足を踏み入れたとしたなら あなたはそこに腐りかけた木製のダイニングテーブルを見つけ そしてその上に一本の錆びたナイフと ザクロのごとき果物の化石が お互いに向かい合うようにして置いてある無人の光景を見出すことだろう まずナイフに目を向けると 無人の家であるはずなのに声がして「今日の家事は全て済ませた——洗濯もしたし 風呂も掃除した 食器も全て洗い終えたし 燃えるゴミも全て処理した」するとザクロからも声がするようで 「ならば最後に まだ残っている全ての紙幣を焼き捨て 全ての写真を焼き捨て 通帳も保険証も 年金関係の書類も 住民票も戸籍も何もかも 一挙に消し去ってしましましょう」 「それが済んだら 我ら二人の年齢も性別も そしてこれまでの関係性も まとめて捨ててしましましょう」とナイフが返答するかのようで 気が滅入ったあなたが空を仰ぐと外はいまだに豪雨のはずなのに この家の真上だけなぜか快晴で この世の果てを目指すかのように 飛行機雲がずっと伸びている 二番目の部屋に入ったあなたの目に飛び込んでくるのは またも腐りかけの木製のダイニングテーブルであり その上にはまたも

互いに向かい合うようにして 真っ白な大輪の花を挿した花瓶と
なにも挿されていない瓜二つの花瓶が置かれている 白い花から
声がする 「私の家の家系図の中に 一人だけ あとから名前を
消された者がいる——私たちの家系には絶対にありえないはずの
血と顔を持った者だったからだ——そんな子供が生まれるはずは
決してなかったはずなのに——その子は 母親とともにどこかへ
棄てられ いっさいの縁を切られ 記録からも抹消されたらしい
その母子の末裔に会ってみたい そして『どうしてそんな逸脱を
運命づけられたのか』と問うてみたい——その一心で 長い旅に
私は出たのだ」 花なき花瓶からの応答に あなたは耳を傾ける
「旅の果てに私を見つけたあなたは 私の体に肉欲を抑えきれず
私を無理やり犯し おかげで私は幾度も堕胎せざるを得なかった」
「たとえ無事に産まれていたとしても 私が虐待死させたかも——
なぜあなたのような者が わたしの家系に生まれたのだろうか？」
「あなたの家が 『私』よりも『公』ばかりを重んじたからです」
花のない花瓶がさらに続ける 「増やし広がることに熱心のあまり
全てをいったんゼロにしてからまたこの世に還ってくるという道
を見失った罪のせいで あなたの家は私のような血を生んだのです」
居づらさを覚えたあなたが 窓から雨の庭の紫陽花たちを眺めると
花全体としては まことに穏やかな日常なのに 一つ一つの部分は
互いに憎しみ合う非常時のままのようで あなたは第三の部屋へと
そのまま導かれるように進む そこにはやはり 腐りかけた木製の
ダイニングテーブルと それからまったく同じ椅子が二脚 互いに
向かい合うように置いてあり テーブル上のセピア色の古新聞には
「むしゃくしゃしたのでやった」 「誰でもよかった」と供述する

殺人犯の記事があり 「今のままだといつか私たちもやられそう」と一方の椅子がささやくかと思うと もう一方の椅子の方からは 「今のままだといつかこいつみたいになりそう」と声がするようで思わずあなたが 「今から何かここで始まるんですか?」と 口をはさむと 二脚が声をそろえるようにして 「全てが始まるのだ」「君も この場所が亡ぶよりも前に 誰かに滅ぼされてしまう前に まだ若くて美しいうちに 私たちのように決断してはどうかね?」と答えるかのようで よく見ると 椅子は両方とも黴だらけで臭く耐えられなくなって あなたが いよいよ最後の部屋の扉を開くと 予想通り 腐りかけの木製のダイニングテーブル 椅子は一脚のみなぜかそのテーブルが 昔あなたが自分で購入したものと瓜二つで腰掛けたくなる気持ちを抑え テーブル上を見渡すと なみなみと毒葉が注がれた杯がひとつ そしてその向こうには鏡が立ててありそこには杯も そしてあなたの顔さえも きれいに映っているのだ 「これを飲むのが『戦争』なら 飲んでしまえばあとは『戦後』だ 平和と復興あるのみだ この国の歴史が それを証明している」と 鏡の後ろから声がして あなたが裏側を覗くと そこに広がるのは夏の碧い海だ 無人の日曜の砂浜だ 炎暑のせいで消えかけている潮だまりでは 満潮の波を今か今かとじっと待つ 二匹のヒトデの交尾が続く あなたこそが その波かもしれぬのに そして鏡には かくも美しく月光が映りはじめているというのに あなたは今日も この家のことなど気にも留めず その横をただ通り過ぎていくのだ

謝辞：詩「日曜日の心中」の初出は、詩と批評『ミテ』第144号（2018年）である。転載を快く許して下さった『ミテ』編集人・新井高子さんに、この場を借りて深く感謝申し上げたい。